

## 国語科授業力の育成のための手立て

国語教育講座・三浦和尚

### 1. 授業の概要

登録学生数は、121名である。

#### [授業の目的]

初等国語科教育の目標・内容・方法について理解を深めると共に、その実践力の基礎を養う。ことばは認識そのものの前提となり、あらゆる学習の基盤となる。言語の教育としての国語科が基礎教科といわれるゆえんである。本授業では、中学校との関連を含む言語の発達論を根底に、学習者を言語生活者として位置付け、言語生活の学習指導のあり方を、小学校国語科教育の目標・内容・方法という視点から考察する。

#### [授業の目標]

○学習者の読む・書く・話す・聞く等の力を養うための基礎的知識を獲得する。

○国語科教育の構造を理解し、国語教育観を構築しようとする姿勢を持つことができる。

○自らの言語生活を振り返りつつ、学習者の視点に立って授業を構想することができる。

#### [授業の概要]

小学校における国語科学習は、他のすべての教科に比べて学習時間が多い。それは、小学校におけることばの学習があらゆる学習の基盤となるという点と、習得に時間がかかるという点を理由とするものである。特にことばは、世界の認識そのものであり、思考のための唯一のツールである。言語の教育としての国語科は、あらゆる認識・思考活動の基盤を形成し、学校における学びのための前提となる。

本授業では、中学校との関連を含む言語の発達論を根底に、学習者を言語生活者として位置付け、言語生活の学習指導のあり方を、小学校国語科教育の目標・内容・方法という視点から考察することにより、小学校国語科教育の目標・内容・方法について理解を深めると共に、その実践力の基礎を養おうとした。

その内容は以下の通りである。

- 1 ガイダンス
- 2 国語科教育の目的
- 3 言語の機能から見た言葉の教育の重要性
- 4 教材「おにたのぼうし」で何が教えられるか
- 5 国語科教材研究のあり方
- 6 国語科教材研究の方法
- 7 国語科授業の目標
- 8 価値目標と技能目標の関係性
- 9 国語科学習指導案の作成
- 10 国語科教材分析「おにたのぼうし」
- 11 国語科模擬授業
- 12 模擬授業の研究協議
- 13 文章表現の学習指導のあり方
- 14 音声言語の学習指導のあり方
- 15 国語科学習と他教科の関係・合科  
シラバスどおりには当然ならなかった。

### 2. 授業評価・授業研究の内容

ひとつ言えることは、模擬授業の効果・必要性である。

今回は小学3年生の文学教材「おにたのぼうし」でも儀授業を行った。これまでの経験から、教材(作品)の読み、解釈そのものに問題がある場合が多かったので、今回は、10時間目に作品の解釈、勘所について詳しく講義した。それに基づいて、指導案を練り直して模擬授業を行ったのである。その大切さには、学生は必ずしも自覚的に気づいていたとは言いがたいが、きちんとした解釈に基づいて授業を展開する姿勢は見せていた。

以下は、模擬授業を行った学生の感想である。

今回の模擬授業によって得たことはとても大きく心に残っている。その中でも一番印象に残っているのは発問の仕方である。あえて抽象的な大きい発問を子どもたちに投げかけることで、これに対する解答が現在の子どもたちの力を凶る手がかりになるし、これからの授業の

組み立ても変化するということにはとても共感し、納得した。また、予想していない答えが出たときの対応については、特に考えておらず、納得のいくものではなかったの、これからの学習課題である。

また、13時の「文章表現の学習指導のあり方」では、実際の子どもの作文にどのように「赤ペン」を入れるかを実習させた。

子どもの作文は、一年生5月の、子どもにとって初めての作文である。

わたしわ  
みみづおみました  
みみづおすずきくんが  
みみづお  
つかみました

この作文に赤ペンを入れてみるということであるが、ほとんどの学生は、「わ」と「は」、「を」と「お」、「みみづ」と「みみず」、「みみづ」の繰り返し等、文章表記等の問題部分を直そうとしていた。

しかし、言うまでもなく、文字習得の途中である1年生5月であれば、そういった訂正よりも、書いて伝わったという喜びを感じさせることのほうが重要であり、私であれば、「おおきなみみずだったね。すずきくんがかんだときはびっくりしたね。せんせいもみていましたよ。」というくらいの言葉を書き添えて終わりにしたいところである。

このような授業について、ある学生は、以下のように述べている。

私は小学校1年生の初めての作文に対しての赤ペンを授業で扱ったときに自分の考えが大きく変わった。私は文法の間違いは見逃して、ひらがなの間違いだけを直そうと考えて赤ペンで訂正した。教員と児童は人と人であるため相手の気持ちに合わせることができないのは当たり前であるが、授業で「直さない」という考え方を聞いたとき、それは直接対面していないときでもそういう意識で子どものことを考えないといけないのだと痛感した。このことは今後教員として児童と関わろうとする自

分の考え方を考えるきっかけになると思う。

教育でもっとも大切な「発達段階に応じて」ということを、実感として受け止めてくれているのではないかと思われる。

このような感想は極めて多く出てきた。国語科学習指導に限らず、教育観の形成においても効果的な教材だったと考えられる。

DPに基づく評価結果は、

- ・教育をめぐるさまざまな現代的課題
- ・教育活動に取り組むための技能
- ・教育の現代的課題への取り組み方法
- ・教育活動に取り組むための表現力

の項目で、「とてもそう思う」「ある程度そう思う」を合わせると、すべて90パーセント以上であった。

### 3. 「授業時間外学習の促進」について

意図的に多くの課題を出し、次時、あるいは数時後の提出を求めた。例えば、

- ・国語科の授業時数が多い理由
- ・「おにたのぼうし」で何が教えられるか
- ・「おにたのぼうし」の指導目標
- ・学習指導案
- ・模擬授業の感想

等々である。これらは、適宜授業で紹介したり、学生に還元したりした。

ただ、テキストの中で授業で扱っていないところの読書は促したが、他の研究書の紹介は怠っている。この点は大いに改善の余地はあると考えている。

### 4. 総括

実践力の育成という形で、最も直接的な指導案の作成と模擬授業という方向で報告したが、むしろ印象的であったのはいわゆる「赤ペン」であった。「子ども菅」「教育観」に直結するものであったと振り返られる。今後もこのような教材を開発していきたい。

実践力の育成とは言っても、5年後、10年後に実践の中で気づいていくような知見を与えることをおろそかにすれば、必ずその教員の成長は頭打ちになる。単なる小手先の技術を持って「実践力」を語ることは言に慎みたいと思う。

専門学校とはちがうという意地もあり、研究的な視点の育成、あるいは、数年後に現場でその意味に気づくようなメッセージを送ることに意を払いたい。